

佐賀県伊万里市民図書館見学報告

平成15年9月12日（金）～14日（日）

なぜ、九州の伊万里市の図書館見学？

図書館へ求められるサービスは、その都市の特徴や人口規模で大きく違うと言われます。それはそうだと思います。利用する住民がどんなサービスを図書館に求めるかによって、図書館は形づくられていくのですから、当たり前のことです。それだけ、図書館というのは住民の意見がもっとも重要とされる公共施設だからです。

そんなわけで、県庁所在地で人口約32万人、分館15館をもつ富山市の新しい中央図書館を考えると、人口約6万人の佐賀県伊万里市の図書館を見学しても、あまり意味がないと普通だったと思います。特に、伊万里市は富山から大変遠く、便利な交通手段があるとはとても言えない場所にあります。たくさんのお金と時間をかけて行く必要があるのか、それならもっと富山市の中央館が担うべきサービスをすでに行っている、同じ規模の自治体の図書館を見学先に選ぶべきではないかとも考えられます。

けれども、私たちは、計画のもっとも初期の段階から市民の意見が採り入れられ、現在も市民参画がひとつの魅力とまでなっている図書館を、直接見たいと思いました。市民が参画すればどんなふうに図書館が活気づくのかを肌で感じるのが、富山で市民として意見を出していくためにはどうしても必要だと思ったのです。

そこで、やっぱり見学先は伊万里市民図書館と決め、新聞各社に募集の記事を載せました。富山市市民活動助成金をいただいておりますので、その中から交通費が7分の1出ることになっていましたが、なにぶん自己負担が高額であったためか、応募者はなく、世話人4名で行くことになりました。

伊万里市民図書館

伊万里市民図書館に見学を申し込んだところ、希望した市民参画の主体である「図書館フレンズいまり」のメンバーの方々と交流はすぐに受け入れられ、事前に質問表を作成して送ることができました。また、せっかく行くのだからと、よりよい図書館見学の仕方を富山市立図書館の方にレクチャーしてもらう事前学習を行いました。図書館の良さは利用者にならないと本当は分からないものですが、少しでも探れるポイントをいくつか教えていただきました。

- ① 見学先図書館のホームページがアクセスしやすいものかどうかを確かめる。←広報活動がきちんと考えられているかがわかる。
- ② 図書館の駅周辺で、市民に図書館の場所を聞く。←図書館が市民の生活にきちんと位置づけられていれば、当たり前のように教えてもらえるはずだから、こうすることによって図書館利用の浸透度が測れる。
- ③ 図書館の建物が、周囲の景観にとけこんでいるか、街のシンボルとしてふさわしいかどうかを見る。
- ④ 入り口近くのインフォメーションコーナーの掲示物が、期限切れのものが張られていないかどうかを見る。
←迅速で正確な情報の提供が図書館の役割であるという理念がここにもあらわれる。

- ① 利用したいと思う雰囲気が入り口からあるかどうか。
- ② カウンターの職員の動線に無駄がないか。
- ③ 図書館での書庫の位置づけやバランスはどうか。
- ④ 自分の調べたい本を検索し、どの程度の労力でさがしだせるかを体験してみる、など。

伊万里市民図書館は、ほとんどがクリアーされていました。伊万里はすばらしい建物でしたから、このようなポイントを学ばなければ、ただ「いいなー、こんな明るくてきれいな図書館」で終わっていたかもしれません。

これに加えて、印象的だったのは「行き届いている」ということでした。とにかく広く変則的な図書館内の隅々までが整えられ、そのときの旬の本や情報をいかに際立たせるかに苦心されていて、利用者の立場にたって、成長しようとしている図書館のエネルギーをびんびんと感じることができました。また、その活気ある状況と出来るだけ長く滞在したくなる憩いのスペースが心憎いばかりに同居している様子にも感激しました。

土曜日の午前中から訪れた私たちでしたが、時間が経つごとに増えていく利用者の数に目を見はりました。特に、家族連れや若者をサービスの主軸においた図書館のためか、独立したヤングアダルトコーナーには中学生・高校生が多く、日常的に利用している様子が伺えました。図書館にはいろいろなサービスの可能性があります、オールラウンドのサービスを目指すと娯楽施設のようになり、日常的な施設として定着しにくいように思います。サービスの基本をどの部分におき、利用者のターゲットをどのあたりにおくかは大切なことでしょう。その点、とても的を得た運営がされていると感じました。

図書館フレンズいまり

昭和29年に市政施行と同時に建てられた伊万里市立図書館は、13年後の大水害で被害を受け、中央公民館の1室に間借りをするようになります。ところが、当初仮住まいの予定だったその1室は、28年間も図書館として運営されることになってしまいます。

「伊万里にまともな図書館がほしい」という声をあげたのは、小学校単位にあった「母と子の読書会」の方々でした。まず、昭和61年に「図書館づくりをすすめる会」が設立され、共通理解のための勉強会・講演会が開催され、子どもたちを連れての先進地図書館の見学が始まります。そして、新しい図書館の計画が持ち上がった大変早い時期から「図書館の用地決定等、建設に際しましては、行政サイドのお考えだけでなく、ひろく市民および“すすめる会”の要望、意見を聞く機会をもっていただくことを要望いたします」という要望書が提出されます。そのため、それまで伊万里市においての市民参加とは行政主導の通過儀礼であったのに対して、図書館づくりにおいては、早い時期での情報公開など、参加の仕方に市民の要望が取り入れられていくことになります。

その後「市民も行政も学習しながらまちづくりをすすめよう」「文化に関しては出来あがったものと同様に出来上がるまでの過程が大切」という伊万里学の提唱者である館長を迎え、「市民運動があるから引き受けた」という建築家との幸運な出逢いを経て、設計段階からの市民参画が始まっていきます。まず建築家が「設計者と図書館、市民の3者による格闘の場所」と位置づけられた8回講座「図書館づくり伊万里塾」が企画されます。つづいて塾終了の8日後、200人参加の「起工式の敷地を歩む会」が開催されます。整地しただけの何も無い地面に、石灰で白く建物の輪郭が描かれた場所を設計者の案内で歩き、新しい市民の図書館をイメージしていく会です。このときすすめる会が用意したぜんざいが好評で、開館された後でも毎年行われることになりました。

そして、司書と市民代表5名参加の「アメリカ図書館見学」が行われます。これは、竹下内閣で行われた「ふるさと創世1億円」が、「国際的視野をもった人材育成のための海外研修事業（グローバル伊万里）」に使われることになっていたため、図書館ボランティア対象にも研修事業が実施されたのです。日本の図書館の百年先を行くと言われ、「図書館は人生を変える」と評価されているアメリカの図書館の見学を体験した市民がいることの意味は、今後の伊万里市民図書館の運営に大きな影響を与えていくことになります。

そして1996年、とうとう市民図書館がオープンし、すすめる会は協力と提言を旗印とする「図書

館フレンズいまり」に発展していきます。組織は6つのボランティアグループを含みつつ、図書館活動の活発化を目的に、図書館との定期的な情報交換の会合が行われています。

その他、大人向け図書館バックの販売や著作権を得たパンフレット「伊万里市民図書館の計画と設計」の販売、飲み物の自動販売の収益などを利用して、図書館内でのコンサートや講演会などを企画されています。ボランティアグループは、ブックモービル（富山という自動車文庫）に司書と同乗して、保育園や幼稚園などで読みきかせを行うグループと布絵本や図書館内の壁面を飾るタペストリーを制作するグループ、図書館内に季節の花を活けるグループ、昔話を採取し語るグループ、視覚障害者に朗読サービスを行うグループ、書籍の点訳を行うグループがあります。

このように、早くから利用者の声が受け入れられ、心づかいの行き届いた図書館ではありますが、5名の正職員を含む15名のスタッフで、本館と70を越えるブックモービルステーションの運営はかなり無理があり、開館時間の延長希望が多いにもかかわらず実現できていない課題を、フレンズとして今後も取り組んでいきたいということでした。

長年の市民の活動は、行政の中で図書館を重要課題の上位に位置付けさせ、市民が意見を伝えやすい環境を作ったと言えます。その礎が、市民と図書館との協働を確かなものにし、結果として活気あるサービスが日常的生まれていることのすごさを感じました。伊万里を体験してきた市民の存在が、今後の富山市立図書館に少なからず影響を与えられるようになればいいなと考えます。またこの報告も含め、具体的に市民の意見を伝える方法を富山でも探っていかなければならないと思いました。

参考文献： 『図書館づくり運動実践記「協働」の図書館づくり』
図書館フレンズいまり 盛康子著 緑風出版